

斑点米カメムシ類の繁殖地におけるイネ科植物刈り取りによる 増殖抑制効果

古川農業試験場

1 取り上げた理由

斑点米カメムシ類は、水田への侵入前、牧草地、雑草地、畦畔などのイネ科植物で繁殖をする。特に、本県の斑点米カメムシ類の主要種であるアカスジカスミカメは、イタリアンライグラス等で繁殖しており、発生源対策としてイタリアンライグラスを含むイネ科植物が刈り取り管理の対照となっている。刈り取り時期については、水田への追い込みを避けるため、水稻の出穂期14～10日前までとしているが、更にアカスジカスミカメの幼虫の発生時期を刈り取り時期とした場合の密度抑制効果について明らかにしたので参考資料とする。

2 参考資料

- 1) イタリアンライグラスにおけるアカスジカスミカメの越冬世代成虫の発生密度は、6月中～下旬にピークとなる(図1、3)。7月上～中旬には第1世代幼虫の発生がピークとなり、1～3齢幼虫が主体となる(図2、4)。
- 2) アカスジカスミカメ第1世代幼虫の発生ピークである7月上～中旬に、イタリアンライグラスを刈り取るにより、水稻への加害世代である第1世代成虫の繁殖地での発生密度を低くすることができる(図5)。

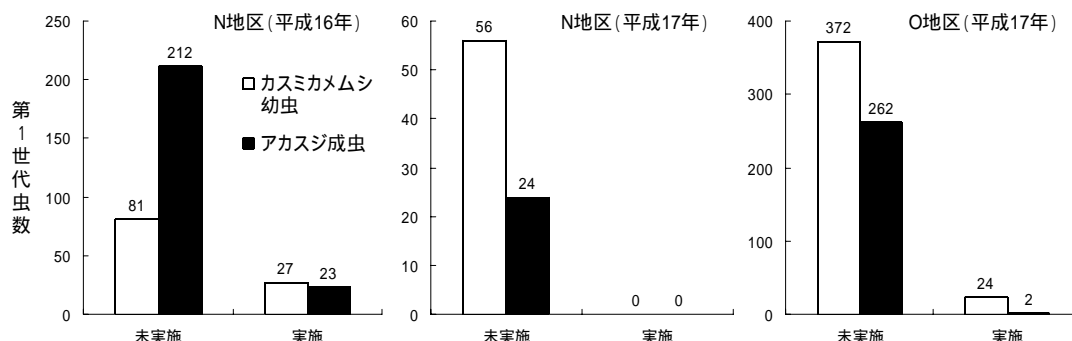


図5 イタリアンライグラスの刈り取りによるアカスジカスミカメ密度への影響
 注) 刈り取りの実施時期: 7月第1半旬(平成16年)、7月第4半旬(平成17年)。
 アカスジカスミカメ第1世代の密度調査: 20回振りすくい取り。
 すくい取り調査の時期: 7月第4半旬(平成16年)、7月第6半旬(平成17年)。

3 利活用の留意点

- 1) アカスジカスミカメの第1世代成虫が、水田内へ侵入する成虫の主体である。
- 2) アカスジカスミカメは移動性が高いと考えられているので、水田内への侵入量を減少させるため広域的に繁殖地の刈り取りを行う必要がある。
- 3) 水田内にイヌホタルイ等の雑草が発生し出穂している場合、水稻の出穂14～10日前であっても、寄主植物の刈り取りにより、アカスジカスミカメ成虫を水田内に追い込むおそれがある。従って、水田内の雑草の発生を広域的に抑え、アカスジカスミカメ成虫の発生時期には刈り取りを実施しないようにする。

(問い合わせ先: 古川農業試験場作物保護部 電話0229-26-5108)

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

発生予察効率化推進事業（斑点米カメムシ対策） 平成14～16年
 斑点米カメムシ類のIPM技術の現地検証 平成17～19年

2) 参考データ

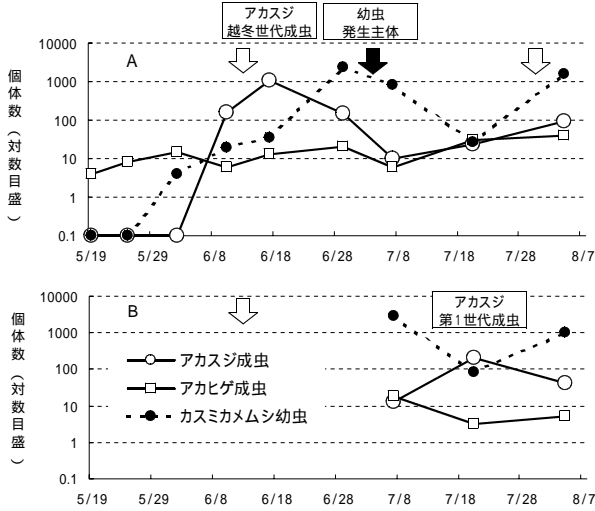


図1 牧草の刈り取りがカメムシ密度に与える影響(平成16年)
 A: 刈り取り実施の牧草地, B: 刈り取り未実施の牧草地(Aの隣接ほ場)
 □: イタリアンライグラス出穂開始, ↓: 牧草の刈り取り
 個体数は、(20回ぶりすくい取り数 + 0.1) で示した。

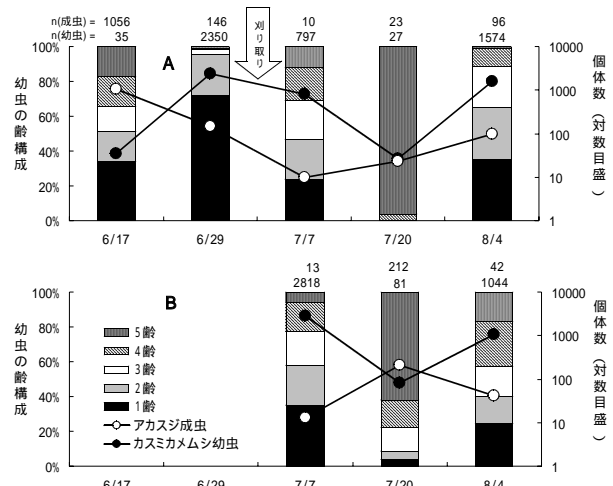


図2 牧草の刈り取りがカメムシ類幼虫の齢構成およびアカスジカメムシ成虫密度に与える影響(平成16年)
 A: 刈り取り実施の牧草地, B: 刈り取り未実施の牧草地(Aの隣接ほ場)
 折れ線グラフのアカスジ成虫とカメムシ類幼虫の個体数は、(20回ぶりすくい取り数 + 0.1) で示した。
 図中の上の数字は、アカスジ成虫(上段)、幼虫(下段)の個体数を示した。

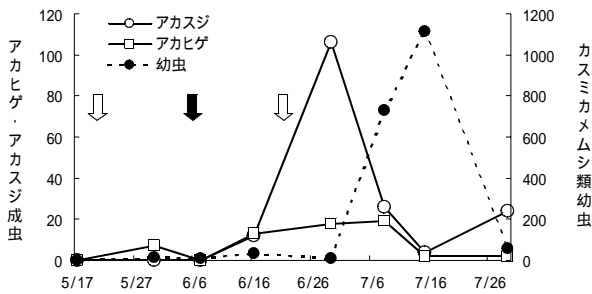


図3 イタリアンライグラスにおける斑点米カメムシ類の発生消長(平成17年 T町N地区)
 注) □: イタリアンライグラス出穂開始, ↓: 牧草の刈り取り

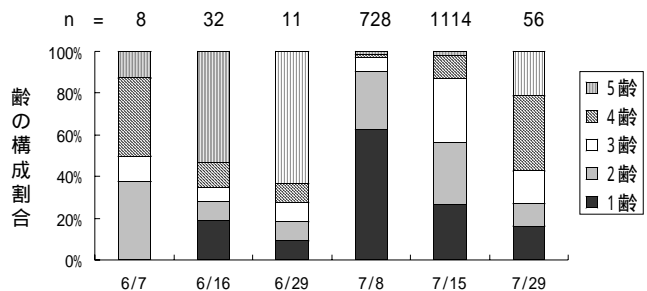


図4 イタリアンライグラスにおけるカメムシ類幼虫の齢構成(平成17年 T町N地区)

3) 発表論文等